

Title	出雲國風土記考證(後藤藏四郎著, 大岡山書店發行)(2)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.1 (1927. 3) ,p.140- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理を實地踏査によつて現在の夫れに比定することに向つて努められたこと、是れである。就中、その後者における著者の努力は異常なもので、それだけこの方面における本書の價値は高いのである。出版書肆が「殊に出雲の地志の研究に到つては、將來ともに先生以外の誰れをも必要としないであらう」と云つてゐるのは蓋し至言であらう。そして神社關係の研究はかの特選神名帳と相似た價値を持つと思ふ。たゞ慾を云へば、著者がより多く地理の土の考證の經過を示されたならば、讀者の本書によつて獲るところは更に大なるものがあらうと思ふ。

本書、始めにはしがきを置き、本風土記研究に必要な概説を試み、次で本文に入る。本文中地圖十一葉を收めてゐる。この地圖は著者が研究の結果を圖示したもので、著者の本風土記研究の目的であつたと同時に、その成果である。そのわれ／＼に與へる利益は少くない。卷末に索引を附したのは書肆の親切であらうか至便である。

紹介者は、出雲風土記研究者は勿論、他の古風土記の研究者のみならず、上代史及び神祇史研究者が本書一本を座右に備へんことを奨め、且つ本書のごとき勞苦多き研究に努められた後藤氏と困難なる出版に成功せられた大岡山書店に敬意を表して、茲に紹介の筆を擱く。(和田軍一)

出雲國風土記考證

(後藤藏四郎著)
大岡山書店發行

遺物遺跡よりの古代研究は、近來大に盛になり、その業績もま

た見る可きものが甚だ多い。然し、古代研究にとつて、最も必要なものの一は、古代文獻の研究である。此の兩方面よりの研究が出来て、初めて古代の研究が完成されるのである。近來、考古學的研究の勃興と共に、古代文獻の研究を輕視する傾向さへも生じたやうに思はるゝが、此の時にあたつて、日本古代の貴重なる一文獻、出雲國風土記の考證を得たのは、まことに欣快の至りである。

古風土記の今残つてゐるものは、出雲國風土記、常陸國風土記、播磨國風土記であつて、やゝ疑はしいと云はれてゐるところの豊後國風土記、肥前國風土記を加へると五つである。が、完全なもののは、出雲國風土記だけであつて、其の記載も、他の四ヶ國のものよりもずつと精密であるからして、出雲國風土記の研究は、最も重要にして、必要でなければならぬ。然も、著者は、出雲國に永年住居する熱心な研究家であつて、一人にして、よく地理、歴史、數學、植物等の専門的知識に通ぜられてゐると聞く。出雲國風土記の考證は、實に、氏にして初めて爲し得るものであらう。

著者は、嘗て、古代の出雲國の地圖を作らうと思ひ立ち、出雲國風土記解や、出雲國稽古知今等の、古代出雲地圖の粗略なのを知り、自ら出雲國風土記の研究中、出雲國風土記解にも、出雲國風土記考にも、隨所に誤謬あることに氣付き、島根縣神職會要報附録として、出雲國風土記考證を掲載した。其後、島根縣皇典攻究所が企てた出雲國風土記本文の校訂事業に加はり、諸種の古寫本を見る機會を得て、今まで唯一の所據として居た訂正風土記は風土記解に盲従する所多く、従つて其の誤謬をそのまま踏襲して

あることを見出し、更に研究を進めて、前に發表した考證を訂正して、本書を出版するに至つたものである。

著者の努力が如何に大であるかは、本文校合に用ひた書が非常に多いのを見ても分る。即ち、日御碕神社本、舊尾張藩徳川家本紅葉山文庫本、植松家本、藤波家本、有造館本、神宮林崎家本、出雲國造家本等十一種である。此等の諸本を以て、本文を校合しただけでも、その業蹟は大であると言はなければならぬ。

又、著者は、當時の出雲の有様を記して、「大日本古文書の、正倉院大書によりて計算するに、天平時代の一戸の平均人口は、約二十人と見ればよからう。然るに、出雲國には、當時六十二郷と餘戸四、驛六、神戸七あつて、その餘戸以下を約八郷に當ると見れば、合せて七十郷である。されば、概略三千五百戸にて、人口は約七萬位あつたらう。」と、その戸口を計算してゐる。

戸口の研究は、澤田文學士の測定もあるが、これは概して抽象的なものであるからして、出雲の當時の人口を測定したのは、著者が始めてあり、特に數學家である著者の計算は、信用を置くに足るものだらうと思はれる。そして、これによつて、天平時代の日本人口研究に一步を入れることも出来るであらうと思はれる。

里數の考證等は、特に詳細であつて、著者自ら實地調査を遂げたものであるからして、他人の追従を許すものでない。例へば、楯縫郡の「新造院一所在沼田郷中、建三立嚴堂也、郡家正西六里一百六十步、大領出雲臣大田之所造也。」の考證に、「この新造院の跡について、風土記鈔や、風土記考の考へて居る所は、ともにあたらず。大正の始め、平田町から山の麓に沿うて宇賀へ行く道

が、今の平田町と西々郷との境に交る點より、正西直線三町の所に、池が掘られたとき、古瓦の破片などが出た。私は、郡家よりの距離から推して、此邊に新造院の址を調べるやう土地の人に依頼したとき、前記の如き報を得たので、急ぎ行きて見れば、紛れもない天平時代の唐草模様ある瓦であつた。よつて、そこを、此の新造院の跡と斷定したのである。云々」とあるのを見ても、著者にして初めてかゝる研究の出来ることを知るのである。かくして從來の諸説の誤謬を訂正する所が非常に多い。

意字郡、神名槌野の考證に『カンナビの意義について、本居宣長は、其郷の賀茂眞淵の説をとりて「神の森」といふことであるとし、モリの約言が、ミであつて、ミとビとは相變化するといつて居る。又、或る人は、ナビは朝鮮語のナム(樹)に相當するといつて居る。併し、いづれもこじつけてある。……』

『思ふに、カンナビは「神籠り」意である。播磨風土記の賀古郡の條に「昔大帶日子命詔三印南別嬢之時云々、印南別嬢聞而驚畏之、即道二度於南毗都麻島云々、敕云、此島隱愛妻、仍號南毗都麻」とある。同書の合藝里の條に「遁二度伴島一隱居故曰南毗都麻」とある。萬葉集二四に「吾背子者、何處將行、己津物、隱之山乎、今日歟起良武」とあるナバリは、ナビを延べた言である。又同書卷九に「暮相而、朝面羞、隱野云々」とある。而して、同じ「隱」の字が、同書卷八に「隱耳居者、鬱悒云々」、又同卷に「隱口乃初瀬山云々」、卷十に「妻隱矢野神山云々」などある。これを以て見れば、ナビはカクレル、コモルの意義をもつ語である。……』

とその意義を説明してゐる一例を以ても、著者が古典學者として該博な知識を有することと共に、其の考證が如何に綿密であるかを知り得るのである。その他、神社や、動植物の考證も、詳細な極めたものであるが、有名な國引の條などを、「これは必ずしも歴史的事實の假裝でもあるまいから、只神話と見ればよい。」とあつさりと片づけてゐる點や、神社の祭神の考證よりも、其の位置の考證に力を入れてゐる點など、物足らなく思はれる所もないではない。

然し、本書は其の博引旁證、精緻なる觀察等よりするも、確に出色の文字たるを失はない。尙、其上、書中に、著者の想像による天平時代の出雲國の圖、及び各郡の圖十一葉を挿入したことや索引を附したことは、讀者にとつて非常に便利である。

最後に、著者及びかゝる地味な研究の出版を喜んで引き上げた大岡山書店に敬意を表すると共に、一斷以て、更に他の風土記の考證をも出版されんことを、大岡山書店に特に望む次第である。

(今宮 新)

日本田制史

(横山 由清著)
大岡山書店發行

一の國文化状態を知るには、多くの標準となるべきものがあらうけれども、出版事業の隆否如何も、また重大な標準となるものであつて、知識の普及が、おのづからにして斯業の發展を促し、知識の向上が必然に良書の出版を求むるに至るのである。

現時のわが國に於いても、また出版業は年々盛大となり、その

出版書數のごとき、汗牛充棟もたゞならぬ有様であつて、まさに聖代の盛事として慶賀にたへない次第であるが、しかしその刊行をみるもの、ことごとく良書であるとは斷じ得ない。わが文化を代表し、わが學界を飾るに足る名著に至つては、むしろ寥々たりと言ふのが至當ではなからうか。

而してその理由の一つは、かゝる名著に對する要求の範圍が、極めて狭小なるがために、出版業の盛大にもかゝららず、それが營利事業である以上、その出版を困難ならしむるからである。従つて、かくのごとき良書の出版は、偉大なる學者の努力はもちろんのこと、他方、出版業者に於いて、學問に對する深き理解と、同情と、大なる犠牲とを必要とするのである。

さきに小金井博士の『人類學研究』を始めとして、其他多くの古典研究に關する良書を出版したる大岡山書店は、今またこゝに紹介しようとする横山由清先生の『日本田制史』を刊行した。吾吾はかゝる良書に接して、その著者に對し、かぎりなき尊敬を拂ふとともに、またその刊行書店の功績を忘れてはならない。

さて横山先生その人に關しては、本書卷末に於ける幸田成友先生の『横山先生に就いて』、並びに佐々木信綱氏の『横山由清翁稿本並手澤本目錄』によつて、大體うかがうことができることと、先生は幕末より明治初年に於ける碩學であつて、殊に吾々が先生を偉とするところは、先生の學問が『實に堂々たるもので、正確な典據によつて、一步一步議論を進められて居られる』のみならず、『先生は今から五十年も前に、既に正倉院、東寺、其の他の古文書を應用され、而も從來の史學が等閑視した、法制史、經濟史